〈高校生の部　佳作〉

切り取る世界

福井県立藤島高等学校　西端　夏生

かしゃあ。少し伸びた、どこか間抜けな音が広がる。携帯のカメラのシャッター音だ。

最近の私の趣味は写真を撮ることだ。趣味と言ってもきちんとしたものではない。一眼レフとか単焦点とか、そんな難しい言葉とは無縁の、お気楽なものだ。

半年前、私はもう高校生になるからと携帯を買ってもらった。しかもただの携帯ではない。俗にいうスマートフォンなのだ。

初めて手にした時のあのわくわくは、今でもはっきりと思い出せる。まるで新しいおもちゃを与えられたかのような高揚感。ＳＮＳやアプリなどもそうだが、特に私の心を奪ったのはカメラだった。元々、写真を撮るのは嫌いではなかった。けれどいかんせん、ガラケーと呼ばれる旧型の携帯では画質があまり良くなかった。別にガラケーを批判しているわけでもないのだが。殊に写真を撮るという点において、私とガラケーは相容れなかったということだろう。だから初めてスマホで写真を撮った時は凄かった。こんなにきれいに撮れるものなんだ。周りの景色が、いつもより色づいて見えた気がした。

それから写真を撮る楽しさに目覚めた私は、よく外に出かけるようになった。学校帰りや家族とのちょっとした旅行中。目に止まった風景を、少しずつ切り取っていった。

外を歩いているときに気付いたことがある。周りの風景が、毎日変わる。空の色、花の色、木の枝の形、私の住む街の様子。当たり前だと笑われるかもしれない。でも私の中で、それはとても大きな意味を持っている。

幼いころ確かにそこにあったものが、いつの間にかなくなっている。じわじわと、私の知らないうちに。昨日確かにそこにあった風景は、今日にはもうどこにもない。万華鏡のように、日が変われば、今という時間が変われば、全く違う顔を見せる。私の周りの世界は、いつもいつも、おなじではない。そう気づいたとき、私のちょっとした趣味はただ写真を撮る、という単純な事ではない。

ゆっくりと変わる自然の中で、目まぐるしく生きる私たちがいる。自然が、それが生み出す素敵なものを見せてくれているとき、私たちは下を向いてばかりだ。それはとても、もったいないことではないだろうか。

人も、自然も、出会いはどれも一期一会だと私は思う。同じ時間、同じ場所、一緒に過ごした人は、必ず一致することはない。それなら少しだけ歩を緩めて、前を見たっていいじゃないか。少しだけ立ち止まって、今しかないこの瞬間を、楽しんだっていいじゃないか。まだまだ、人生は長い。誰も文句は言わないだろう、自分の人生なのだ。

だから私は写真を撮る。私という人間を作る毎日を、当たり前だけど当たり前じゃない風景を、いつまでも残すために。大切なだれかとの思い出を、忘れないために。

ちょっとだけ、一度しかないこの世界を切り取って、大切に心の中にしまうために。